

問題・解答 用紙番号	44
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部〉

看護学部、農学部【理系科目型】

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(五五点)

日本で欧米型の百貨店が誕生した明治末、その顧客となったのは、都市部で増大しつつあった会社員を中心とする新しい中間層であった。黎明期の日本の百貨店は、前身であった呉服店からの老舗イメージを継承しつつ、都市部の中間層の西洋文化への憧れを商品に反映させ、高級な和洋折衷型のブランドイメージを駆使しながら近代的百貨店へと転身した。三越呉服店、高島屋、白木屋といった老舗呉服店は、その資本力を利用し、積極的な経営改革と、商品開発を伴う新たな市場作りを行った。初期百貨店で扱ったのは、主に日常生活には必要のない贅沢品であった。国内産業の発展は化粧品や洋酒、文具、洋家具など、高級な輸入品の国産化を促進した。国産品が増加することにより、こうした贅沢品が中間層にも手の届く商品として百貨店で大量に販売されることになった。生きるためには特に必要ではない贅沢品をいかにして購入させるか、初期百貨店で何より重視されたのは、消費の欲望を人々に喚起させるということであった。ポスターや新聞・雑誌などの広告、商品陳列という新しい消費のスタイルの導入や、呉服柄に始まる流行操作の試み、さらには①———な店舗空間や店内の文化的なイベントなどは、多くの人々を余剰の消費に向かわせるために効果を発揮したといえる。

その後の大正時代の百貨店を中心とする消費文化は、初期の高級路線から大衆化へと変質していく時代であったといえる。一九〇三年専門学校令、一九一八年大学令など相次ぐ高等教育機関の整備により、上京して大学や専門学校などで高等教育を受ける人数は増大し続けた。第一次大戦後、物価高騰が続く日本では、増大した都市部の会社員の社会的地位は、相対的に低下していく。彼らの多くは単身で都市に定住し家族を持ったが、物価高騰に会社員の賃金上昇が追いつかない中、次

第に生活が苦しくなっていた。大正期の百貨店に足を運んだ多くが、こうした「庶民化」し始めた会社員とその家族であった。

都市部の中間層の上昇志向を巧みに取り込みつつ、憧れの生活を手軽に購入できる「手の届く高級店」であった百貨店は、その後大正半ばまでには^②変質をヨギなくされた。三越呉服店では一九一九年に開催された「大阪・さかえ日」「東京・木綿デー」などを境に、綿織物や日用雑貨、食品など日用品の大売り出しを始め、人気を博した。また一九二二年には白木屋が常設売り場として呉服、雑貨の格安品売り場を設けている。こうした百貨店の大衆化は関東大震災以降、さらに加速した。多くの百貨店が震災により店舗を焼失する中、「マーケット」「出張店」といった仮設店舗を分散して開設し、日用品を大量に安く提供し、人々の需要に応えた。震災復興が進む中で本店の百貨店は復活していくが、安売り品の販売は続けられ、^A百貨店の路線そのものにおいて初期の高級路線からの脱却が顕著となった。

^B会社員の生活苦が社会問題になる中、一九二〇年に結成された文部省の外郭団体・生活改善同盟の目的は、衣食住から社交、生活習慣にいたる日常生活全体の合理化、改善であった。この中の「住宅改善調査委員会」で一九二四年に出された調査報告「住宅改善の方針」では、住宅とその起居様式の洋風化、合理化を提唱しているが、その報告の最後に記されたのが「大都市では地域の状況に依り共同住宅（アパートメント）並に田園都市の施設を^③シヨウレイすること」であった。

大正期になると、私鉄^Cの鉄道網の発展に伴い東京、大阪のような大都市部では中間層の新たな住まいとして、郊外住宅地開発が本格化した。関西では小林^{いさみ}二三による箕面^{みのお}有馬電気軌道（現・阪急）沿線の住宅地開発がその嚆矢とされ、一九一〇年に始まった池田^{いけだ}室前^{むろまえ}の開発以降、沿線の開発が行われた。間もなく小林の開発手法は関東にも及び、大正後半には渋沢栄一による田園都市株式会社が目黒蒲田電鉄の経営と併せて玉川台（現・田園調布）など住宅地開発を本格化していく。分譲された郊外住宅地には「文化住宅」と呼ばれる小型洋風住宅が立ち並び、中間層の憧れの住まいとなった。その多くが^D谷崎潤一郎の『痴人の愛』で主人公がナオミと暮らす家のように安普請の和洋折衷住宅であったが、封建的な在来和風住宅とは異なる洋風の生活様式は、まさしく同時代に流行した「文化」「モダン」といった語を象徴するものであった。

郊外から都心への人の流れをつくった阪急の小林二三は、梅田駅直結の百貨店という構想に着手する。一九二〇年に竣工した阪急梅田ビルにおいて、一九二五年には食料品や生活雑貨を扱う阪急マーケットを開店させ、一九二九年には阪急百貨店へと発展した。旧来の商業地にあった老舗呉服店を起源とする百貨店が徹底して高級路線を展開していたのに対して、郊外住宅地の住民をターゲットとしたターミナル・デパートが目指したのは、食品や日用品を充実させた庶民的な店であった。梅田の阪急百貨店は「どこよりもよい品物を、どこよりも安く売りたい」という小林の意志が反映され、最上階の大食堂では低価格で提供されるライスカレーが評判となった。

ターミナル・デパートは私鉄資本による郊外開発を背景に生み出された、日本特有の百貨店のスタイルであるといえる。私鉄各社は電鉄経営を基盤とし住宅地開発と、都心への終着駅にはターミナル・デパート、そして郊外の終着駅付近にはレジャー施設をつくり、沿線住民の消費生活すべてを包含する複合的な戦略をとった。阪急の宝塚新温泉の開発はよく知られているが、このほか二子玉川園玉川遊園地（一九〇九）、多摩川園（一九二五）など、私鉄による沿線の娯楽施設の整備が進んだ。こうした遊園地をはじめとするレジャー施設はどこも家族のための「健全な娯楽」を提供すべく、^③ 猥雑な見世物小屋の並んだ庭園由来の遊園地とは一線を画した。同時に、後述するようにターミナル・デパートの屋上にも遊園地や動物園が備えられ、家族のための文化的な休日を提供する場となっていた。

明治初年に外国人技師T・ウォートルスの設計で建設された銀座煉瓦街（一八七七年に全街区完成）は、車道と歩道の分離、街灯と並木のある大通り、煉瓦造りのアーケード型不燃建築などが話題となった。明治二〇年代には洋服店、時計・宝飾店、薬屋、洋食店、新聞社などが立ち並び、文明開化を代表するハイカラな街として知られるようになっていった。初期の銀座は高級な舶来品店が集積した、上流階級や文化人のための商店街であり、銀座を通して人々は西洋の文化をキョウジューした。^④ しかし大正前半までの実際の東京の商業の中心は依然として江戸から続く日本橋室町周辺であり、百貨店が集まる最大の商業エリアであった。この状況を一変させたのが関東大震災であった。震災以降、銀座には大衆化したカフェーが次々と開店し、また同時に老舗百貨店の銀座への進出が加速した。一九二四年松坂屋、一九二五年松屋、一九三〇年三越（再進出）というように、尾張町交差点（銀座四丁目交差点）^E 近くに三店の百貨店が競合し、これが銀座の本格的発展につながった。進出した百貨店は銀座の光景のひとつに組み込まれ、消費の場が点から面へと拡大していったのが、大正期の銀座であった。

銀座の近代的な歩道とショーウィンドウのある店舗は、都市の「遊歩者」を生み出したといえる。ショーウィンドウの商品を眺めながら、目的もなくふらふらするという、近代都市の新しい楽しみ方「銀ブラ」が人気となった。銀ブラの語源は諸説あるが、銀座をぶらぶら歩くだけでなく、「カフェバウリスタでブラジルコーヒーを飲む」ことだったともいわれている。遊歩する都市の休息所であり、様々な文化の情報が行き交う場として、銀座にはバウリスタやカフェ・プランタンをはじめ、ソーダ・ファウンテンやパーラー、ビヤホールなどが開店した。中でもカフェ・ライオンのようなアルコール提供を主とした店が次第に多くなり、この傾向は震災後になるとより鮮明になった。カフェー・タイガー（一九二四）、カフェ・クロネコ（一九二七）など、アルコールと女給のサービスが主となる風俗営業店が増え、永井荷風らの小説の舞台となり、盛り場の大衆化が進んでいった。

東京駅の完成により、大正後半になると日本橋、京橋エリアから丸の内へオフィスの移転が増加

し、銀座は丸の内に通勤する会社員が昼休みや仕事帰りに立ち寄る場として人気を集めていく。初期百貨店に足を運んだのは、主に会社に通勤する成人男性であつた。百貨店に実際に訪れるのは自身の紳士用品、家族への土産の菓子類など買い求める男性が多く、女性が自由に外出できる環境は整っていなかった。しかし大正末になると、百貨店のポスターには子ども連れの女性が多く描かれるようになっていく。女性が消費の場に足を運ぶことを後押ししたのが銀座の百貨店であつた。一九二七年の地下鉄銀座線の開通により、女性や学生なども含め、渋谷など開発され始めた郊外に住む人びとが気軽に行ける場所となつたのである。

百貨店とカフェに代表されるように、大正末以降の銀座は歓楽と消費の場が混ざり合う新たな盛り場として多くの人を集めた。そして最先端のモダン風俗の男女「モダン・ボーイ」「モダン・ガール」が登場し、昭和に入ると大衆化の流れが本格化していくことになる。

大正時代の消費文化は、デモクラシーの思潮を反映し家族本位、特に子どもを中心的存在とする家族が消費の単位となつた。阪急の小林一三は、中間層の家庭のための健全な生活文化を提供することを目標に掲げた。近代家族観が西洋からもたらされる中で、明治二〇年代に堀利彦^{さかるとしひこ}らが提唱した「家庭」という語は明治末頃までには都市部の中間層には広まっていたが、それと同時に子どもの存在が大人とは区別され、独自の世界を持つものであると認識されるようになる。この中で封建的家族制度は否定され、親密な「家庭」とその団らん^{だんらん}の形成が重視された。この考えが大正期の童心主義につながっていくことになるが、近代子ども観をいち早く利用したのは百貨店のような消費の場であつた。

すでに明治末には、子ども用品という有望な市場に着目した三越では教育熱心な中間層の親に向けて、様々な子ども用品を販売するようになった。子どもの教育に役立つ教育玩具の販売、さらには子ども服や文具、子ども用家具、食器など、百貨店では、大人と区別した「子ども用」の商品を積極的に売り出した。三越呉服店で一九〇九年から一九二一年まで開催された児童博覧会では、子どもそのものではなく、子どものための商品を展示することで、子どもや親たちの物欲を掻き立て、「正しい環境で教育されるべき児童」という新しい概念を広める役割を果たした。こうした百貨店の試みによる子ども用品の消費文化は、子どもの生育環境に関心を持つ大正期の家庭に根付くことになる。

初期の百貨店ではかなり大々的に子ども用品が売り出された。七五三や雛祭りは、晴れ着や雛人形を売り出す格好の機会であり、明治維新後しばらく衰退していたこれらの習俗を明治末に復活させたのが、百貨店であつた。これら古くからの年中行事に加えて百貨店が子ども用品売り出しの好機と考えたのが、新入学・新学期のシーズンであつた。教育制度の普及とともに、子どもは明治末に初等教育の就学率が九割を超えた。ノートや鉛筆、筆箱といった学習用具は親たちが新学期に買い揃えるべき用品であるとともに、子どもの入学祝いなどに適切な贈答品として「文具セット」が

売り出された。さらに大正時代になると通学のための用品は、安定した需要の見込める大きな市場として着目されていく。文具のほかにも通学カバンや通学用靴、通学服、さらには子ども用学習机が、二月頃から大々的に紹介されるようになる。

百貨店は子ども用品市場^⑤をカイトクしていくと同時に、子ども連れの家族が休日を過ごす娯楽の場を積極的につくりだした。百貨店各店が鉄筋コンクリート造の店舗に改装する中で屋上を設けるようになると、そこには子どものための動物園や遊園地がつくられるようになった。一九二六年、銀座松坂屋では屋上動物園が設置され、ライオンやヒョウなどの猛獣が飼育展示され話題となった。その後各店の屋上で遊戯機械の導入が進んでいくことになる。大正期の百貨店は、休日の家族団らんのための、皆が楽しめる場となった。^G大正から昭和初期にかけて、子どもの双六にも百貨店を題材にしたものが登場するようになる。川端^{りゅうじ}龍子の画による『少女の友』一九一四年一月号付録「買ひ物双六^{*}一名デパートメントストア」では百貨店の断面図が描かれ、入り口から各階を巡り、最後に屋上で「上がり」となっている。双六は初期において百貨店とはいかなるところか、ということとを視覚的に案内する役割を果たしており、大人向けにも同様の案内が見られた。しかし大正期に百貨店が家族で訪れる楽しい場所になっていくことで、例えば一九二八年の「三越双六」では、正月の風揚げに始まり、雛祭りや夏祭り、ピクニック、クリスマスといった子どもが楽しむ行事を経て、最後は「家族で百貨店に行く」ことがゴールとなっている。すなわちこの時点で、百貨店は未知の商業空間ではなく、子どもが楽しみにしている家族の娯楽として認知されるようになっていたのである。

(神野由紀「百貨店と消費文化の展開」)

* 一名……別名 またの名。

問一 傍線部①～⑤のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問一 傍線部 A 「百貨店の路線」とあるが、黎明期から大正期にかけての路線について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 初期の百貨店は、呉服販売の重視を継続しつつも、同時に欧米諸国からの輸入品の販売にも力を注いだ。

イ 大正時代に百貨店が大衆化した主な要因は、都市部での専門学校や大学などの増加と就職先の増加であった。

ウ 大正期の百貨店の新たな広告スタイルは、それまでは必要とわれていなかった商品の必要性を消費者に喚起することに役立った。

エ 大正期初め頃に日用品を安価で売り出し始めた百貨店は、関東大震災後には高級品の販売を次第に止めるようになった。

オ もともと呉服店であった黎明期の百貨店はその資本力により、輸入にたよっていた高級品の国内生産ひいては低価格化を実現した。

問二 傍線部 B 「会社員の生活苦」とあるが、その理由を具体的に説明した部分を含む一文の最初の五文字を抜き出さなさい。

問四 傍線部 C 「鉄道網の発展」に伴う開発について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 日本で初めて私鉄の鉄道網が整備された大阪では郊外住宅が発展し、渋沢栄一らによる東京での郊外住宅の開発はこれをモデルにした。

イ 沿線住民の消費のすべてを取り込むことを目的に、私鉄各社が都市部と郊外それぞれの終着駅に施設をつくった。

ウ 郊外住宅の開発に本格的に着手した私鉄会社の中には、その経営基盤が鉄道から住宅へと変化した会社もあった。

エ 新たな住宅地開発により中間層の生活問題は解消されたが、都市部の住民との経済格差が新たに問題となった。

オ 阪急梅田ビルでは、当初高級路線の百貨店と庶民的な店が併存したが、前者は消費者のニーズに合わず撤退した。

問五 傍線部D「谷崎潤一郎」について、彼の作品を次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア 「破戒」
- イ 「高瀬舟」
- ウ 「虞美人草」
- エ 「春琴抄」
- オ 「友情」

問六 傍線部E「銀座の本格的発展」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 大正期から始まったカフェーの開店や百貨店の進出に象徴される銀座の大衆化は、昭和初期に決定的となった。
- イ 大正期の銀座では、百貨店とともにカフェーや風俗営業店が増加したため、百貨店の顧客は主に会社に勤める成人男性であった。
- ウ 大正後半の銀座では、渋谷といった郊外との交通アクセスが向上したため、訪れる層が若年化した。
- エ 大正末に銀座の百貨店のポスターに子連れ的女性が描かれたため、銀座は男性から敬遠されるようになった。
- オ 震災以降、銀座や日本橋室町では高級な舶来品を販売する百貨店が増え、上流階級のニーズを満たし、街が発展した。

問七 傍線部F「近代子ども観をいち早く利用した」とあるが、これについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 明治末以降、子どもの教育環境についての新たな考えが広まったことで、百貨店にとって教育玩具や衣服といった子ども用品には大きな市場が見込まれるようになった。

イ 明治末以降、百貨店は晴れ着や文具セットといった子ども用品の販売を始めるだけでなく、屋上での動物展示などといった試みを行うことで、大正期には家族単位での消費の場としての性格を新たに帯び始めた。

ウ 子どもの教育環境についての新たな考えや教育制度の普及により、晴れ着や雛人形の売れ行きが落ち込んだものの、この状況をむしろ好機と捉えた百貨店は文具や通学必需品とともにそれらの販売を図った。

エ 百貨店での子ども用品の販売の増加の背景には、百貨店が子どもや親たちの購買欲を掻き立てただけではなく、日本の教育制度の充実とそれに伴う文具や通学用品の需要増加があった。

オ 百貨店が利用した近代子ども観では、それ以前の考え方とは異なり、大人と子どもがそれぞれ独自の世界を持つものとされ、特に子どもが家族の中心的存在と位置付けられるようになった。

問八 傍線部G「大正から昭和初期にかけて、子どもの双六にも百貨店を題材にしたものが登場するようになる」とあるが、このことについて述べた次の文中の空欄 X 。

Y に入る適切な表現を、本文中の言葉を用いてそれぞれ十五字以内で答えなさい。

初期の双六は X 役割をもっていたが、後年の双六は「家族で百貨店に行く」ことがゴールになっていることから、百貨店が Y と位置づけられていることがうかがえる。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

人間はあれこれと後悔する。こんな運載、引き受けなければよかった、等々。では猫はどうか。いや、別に猫にかぎらない。人間以外の動物は、後悔をするのだろうか。

猫が鳥に襲いかかる。逃げられる。でも、惜しかった。そのときその猫は、「もう少し忍び足で近づいてから飛びかかれればよかったにや」などという日本語に翻訳できるような仕方では後悔するのだろうか。私の考えでは、しない。いや、できない。猫は、そして人間以外の動物は、後悔というものを為しえない。なぜか。

後悔するということは、事実¹に反する思いを含んでいる。「ああすればよかった」というのは、そうしなかったという事実¹に反する思いであり、「あんなことしなければよかった」というのはそんなことをしてしまったという事実¹に反する思いである。ならば、事実¹に反する思いをもつというのは、どのようにして可能になるのだろうか。

ひとつ用語を導入しておきたい。『論理哲学論考』においてウイトゲンシュタインは、可能な事実の総体を「論理空間」と呼ぶ。そこには、現実¹に起こった事実と現実には起こらなかったけれど起こりえたという事実が含まれている。ここで、「起こりえた」というのは目いっぱい広くとっていただきたい。私は現実には大学の教員をしているが、もしかしたら大リーガーであつたかもしれない。もちろんそれがふつうの意味では「ありえない」ことなのは私が一番よく承知している。だが、能力的に実現不可能であつても、思考不可能ではない。「もし私が大リーガーであつたなら」と反事実的な想像をすることは別に矛盾ではない。私が大リーグでホームランをばかすか打つ。どこに矛盾があろうか。

ここで捉えられる「可能性」は、われわれが捉えうる最も広い意味での可能性、つまり論理的可能性にはかならない。それは論理的に矛盾しないかぎりには可能であると言われる。そんな可能性の総体、それが論理空間である。現実の世界というのは論理空間の中のごく一部分にすぎない。実際に起こっていることを取り巻いて、現実化しなかった可能性が広大に開けている。だが他方、われわれはただこの現実の世界を生きるしかない。ここに問題の根っこがある。

われわれが出会うのはすべて現実の世界である。可能性の世界などというものがどこかにあるわけではない。へたをすると「思考の世界」などというものを想定し、しかもそれを「心の中」に位置づけたりしたくなるかもしれない。だが、見まわしてほしい。部屋の中、あるいは窓の外。見えるのは現実¹に起こっているさまざまな事実である。「心の中」(実にいいかげんな言葉だと思うが、いまはそれには目をつぶって)を探ってみてもよい。軽く頭痛がする。それも現実¹に起こっている事実である。あれやこれや考えている。非現実的なことを考えているかもしれないが、そう考えて

いること、それは現実の事実である。文字を書きつける。声に出さずに語る。イメージを思い描く。あるいは脳がある状態になる。すべて、現実が起こっている事実にはかならない。

私に与えられているものは現実の事実だけである。しかし私は現実を取り巻く可能性の総体たる論理空間を理解している。だとすれば、この現実を元手に、論理空間の理解が形成されるのでなければならない。それはどのようにしてか。

なによりもまず、世界が分節化されていなければならない。例えば白い犬が走っているという事実を、われわれは、〈白い〉という性質と〈一匹のあの犬〉という対象と〈走っている〉という動作といった要素から構成されるものとして捉えている。こうした構成要素を取り出すことを「分節化」と言う。

われわれはすでに分節化された世界に生きている。分節化されていない世界とは、いわば徹底的な あ の世界にも喩えられるだろう。そこでは、あらゆる対象の輪郭が失われ、それら対象がもっていた意味も消え去る。そんな世界。他方、われわれが生きている世界はそうではない。われわれは、〈あの犬は白い〉という事実から、〈あの犬〉という対象と〈白い〉という性質を分節化し、あるいはまた〈机の上にパソコンがある〉という事実から、〈その机〉と〈そのパソコン〉という対象と〈…の上に…がある〉という関係を、その事実を構成する要素として分節化している。あまり細かい区別をしてもしょうがないので、性質と関係をあわせて「概念」と呼ぶことにしよう。われわれは世界をさまざまな対象とさまざまな概念に分節化して捉えている。

Ⅱ
かりに世界が分節化されていなかったなら、反事実的な思いも不可能となるだろう。犬が走っているという事実を前にして、その犬が逆立ちするという反事実的なことを考える。そのような思いが可能になるのも、〈その犬〉という対象と〈走る〉という概念が別々の要素として捉えられているからである。その犬はなるほどいまは走っている。しかし、走っている状態しかありえないのではなく、歩いていたり寝ていたり、あるいは逆立ちすることも、考えることができる。それは、〈その犬〉という対象を〈走る〉という概念以外の要素（〈歩く〉〈寝る〉〈逆立ちする〉等々）と組み合わせる事が可能だということにはかならない。そのためには、〈その犬〉という対象と〈走る〉という概念は別々の構成要素として区別されていなければならない。つまり、論理空間を開くには、世界が対象と概念に分節化されていなければならないのである。

ただし、ここでもう少しことがらを正確に捉えておきたい。いま述べたように、論理空間を開くには世界が分節化されていなければならないが、逆に、世界が分節化されているためには論理空間が成立していなければならないのである。

机の上のパソコンを考えてみよう。なるほどいまは机の上にあるが、可能性としてはそのパソコンはさまざまな場所にありうる。例えば床の上に置く。あるいは部屋の外に持ち出す。そこで、われわれがそうした可能性を理解していないとしてみよう。そのとき、そのパソコンはその机の上に

しかありえないものになってしまうだろう。そのパソコンとその机が分離されることを、われわれは想像することさえできない。そうなってしまうたら、それはつまり、そのパソコンと机は分離不可能（しかも論理的に分離不可能）ということであり、それはもはやさらなる要素に分解不可能な一つの対象ということになる。

机の色についても同じように議論される。いまはその机は茶色だが、もしその机が茶色以外の色である可能性をわれわれが理解していないのだとすれば、その机は茶色でしかありえないことになる。そのとき、その机と茶色という色は論理的に分離不可能となり、それらを別々の要素として分節化して考えることは不可能である。

さらにこの議論は、パソコンと机に対してだけでなく、机と床に対しても成り立つ。いま机は床の上にあるが、われわれはそれが他の場所、例えば外の路上にあるといった反事実的な可能性も理解している。そこでもしそのような反事実的な理解がないのであれば、その机とその床は論理的に分離不可能となり、分節化されていないことになる。かくして、パソコンと机が癒着し、机と床が癒着し、床は建物と癒着し、建物は地面と癒着して、ついには宇宙全体が論理的に分離不可能になってしまうだろう。

世界から対象と概念を分節化して捉えるためには、その対象と概念が他のさまざまな対象や概念と組み合わせられる可能性が理解されていなければならないのである。したがって、世界が分節化されるためには論理空間が成立していなければならない。このことと、先に示した「論理空間が成立するためには世界が分節化されていなければならない」を併せるならば、つまり、論理空間の成立と分節化された世界の成立は、どちらが先というのではなく、

なのである。

さらに、論理空間の成立のためには、それゆえまた分節化された世界の成立のためには、われわれは分節化された言語をもっていなければならない。

言語にはさまざまな働きがあるが、その中の重要なものは、ものごとを表現するという働きである。例えば、「白い犬が走っている」という言葉は〈白い犬が走っている〉という事実を表現する。しかるべき場面で「あの犬」と言えば、それはある一匹の犬を表現する。あるいは「白い」という語はある範囲の色を表現している。逆に、ものごとを表現する働きをもつたものはすべて「言語」と呼ぶことにしよう。われわれはふつう「言語」というと音声言語と文字言語だけを考えがちだが、言語の働きをもつたものはさらにさまざまにある。例えば種々の図案で表わされた標識なども言語であり、鉄道路線図も言語であり、設計図のような図面も、それが実際に作られるべきものを表現しているという意味では言語である。あるいはまた、飲食店に置かれてある食品サンプルも、実物の

 という意味で言語と言えるだろう。

もし、われわれの世界から、これら言語と称すべきものたちのいつさがなくなつたとしたら、どうだろう。私の考えでは、そのとき世界もまた未分節の状態になるしかない。そのことを示すだ

めに、「世界は分節化されているが、分節化された言語はもっていない」と仮定してみよう（背理法の仮定）。

先ほど論じたように、〈机の上にパソコンがある〉という事実が〈その机〉〈そのパソコン〉〈…の上に…がある〉という構成要素に分節化されているためには、それらの要素が〈机の上にパソコンがある〉という組合せ以外の組合せ、例えば〈パソコンの上に机がある〉といった組合せを作りうるでなければならない。さもなければ、〈机の上にパソコンがある〉という事実はそれ以上分節化されないひとかたまりとなってしまうだろう。だが、いま、いつさいの言語がないと仮定している。〈その机〉や〈そのパソコン〉という対象、および〈…の上に…がある〉という概念を表現してくれる言葉がない。だとすれば、その対象や概念そのものを組み替えてみるしかない。つまり、実際にパソコンの上に机を置いてみるしかない。そんなことをしたらパソコンが壊れるだろうということは措^{ちか}えておくとしても、根本的なことは、それはもはや現実のことであり、たんなる可能性ではないということである。

Ⅲ
やはり、どうしたって言語がなければならない。言語がなければいつさいは現物となる。そのとき、現物に対してさまざまな組合せを試してみたとしても、それらはすべて現実の事実になるしかない。それゆえ、反事実的な可能性を開くにはどうしても現物の代理物たる言語が必要なのである。われわれはそうした言葉をさまざまに組み合わせる。それが、さまざまな可能性を表現する。最初に述べたが、可能性の世界なるものがどこか（心の中であれイデア的な世界にであれ）にあるというわけではない。言語もまた、現実の一部にはかならない。食品サンプルは心的な何ものかでもイデア的な何ものかでもなく塩化ビニールで作られており、音声言語は空気振動であり、文字言語は現実^{じつ}に書きだされたインクの染み等である。それゆえ、言葉を用いているときにも、われわれはけっしてこの現実世界の外に出て行っているわけではない。われわれは現実^{じつ}に生きるしかない。この現実の中で、空気振動やインクの染みや塩化ビニールの塊を適当に操りながら、さまざまな可能性を表現するのである。「白い犬が逆立ちして走り去る」という模様を紙上に描けば、それは白い犬が逆立ちして走り去っていく可能性を表現している。可能性とは、このように、言語が表現するものとしてのみ、成り立ちうる。それ以外に可能性の生存場所はない。

可能性を開くために必要とされる言語は、分節化されていなければならない。さもなければ、言語においてさまざまな組合せを試すことができないからである。「机の上にパソコンがある」という言語表現があり、それが「机」「パソコン」「…の上に…がある」という語句に分節化されているからこそ、インクの染みにおいて「パソコンの上に机がある」という組合せを試すことができる。そしてそれが、〈パソコンの上に机がある〉という非現実の可能的な事実を表現する。われわれはこうして、そしてこのようにしてのみ、可能性を了解するのである。

論理空間・分節化された世界・分節化された言語、これらはすべて厳密に同時に成立する。それ

ゆえ、言語をもっていない動物は可能性の了解をもたず、分節化された世界にも生きていないことになる。言語をもっている動物でも、それが分節化され、さまざまな組合せを試せるような構造（構文論的構造）をもっていない単純な言語にとどまるかぎり、それは論理空間を開く力をもっていない。

かくして、^{IV}猫は後悔しない。人間だけが後悔する。

（野矢茂樹『語りえぬものを語る』一部改変）

問一 空欄 ・ に入る最も適切なことばを、次のア～オのうちからそれぞれ選
びなさい。

- | | |
|--------|---------|
| あ ア 白黒 | い ア 規格品 |
| イ 野生 | イ 装飾品 |
| ウ 抽象画 | ウ 既製品 |
| エ 空想 | エ 模倣品 |
| オ 不合理 | オ 代用品 |

問二 傍線部Ⅰ「論理空間」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びな
さい。

- ア 論理空間には、現実起こったことと現実起きる可能性のあったことの全てが含まれて
いる。
- イ 論理空間に含まれる可能性には、論理的に不可能であるという意味で実現不可能なことは
含まれていない。
- ウ 大学教員である筆者が大リーガーであったかもしれないという反事実的な可能性は、論理
空間において存在している。
- エ 現実の世界は論理空間のごく一部にすぎず、実現しなかった多くの可能性がそれを取り巻
いている。
- オ 我々は現実の世界を生きるしかないが、他方、可能性の世界を了解しているので、可能性
の世界も論理空間の中に別個に存在する。

問二 傍線部Ⅱ「かりに世界が分節化されていなかったなら、反事実的な思いも不可能となるだろう」とあるが、その理由を説明した以下の文の空欄 ・ ・ に入る最も適切な言葉を本文中から抜き出さない。

犬が逆立ちするなどという反事実的な可能性を考えるためには、世界を と に分節化した上でそれらを様々な 必要があるから。

問四 空欄 に入る最も適切な言葉を、本文中から抜き出さない。

問五 傍線部Ⅲ「言語がなければならぬ」とあるが、言語の働きについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選ばない。

ア 言語の重要な働きはものごとを表現するということであり、その意味では設計図も言語である。

イ 世界から言語がなくなってしまうと、世界は全てが一つのものになってしまう、われわれは可能性を了解することができなくなる。

ウ 食品サンプルが塩化ビニールでできていることは、食品サンプルが言語としての機能を果たす上で妨げとはならない。

エ 言語によってこの世界は、現実の世界として認識されるようになるのであり、言語が存在しなければ、現実と可能性の区別もつけることができない。

オ 言語は論理空間を開くものであるが、言語による可能性の表現は、現実世界の中で行われるしかない。

問六 傍線部Ⅳ「猫は後悔しない。人間だけが後悔する」のはどうしてか。七十五字以内で説明しなさい。